

Title	木崎愛吉氏編の大日本金石史, 全三巻附圖一函
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.346- 347
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0346

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十枚進上悅入候就中於日本地者東目下迄悉治掌天下靜謐候條筑紫乍見物可被成動座候其刻高麗國へ被遣御人數成次第可被仰付候間其砌忠節可被申上候依其動國郡等某仁爲褒美可被下候之條可遂勳功儀尤被思召候猶利休居士可申候也

六月十六日 花押(秀吉)

宗讚岐守とのへ

宗讚岐守とは義調である、この文書は斐紙に認められ且懸紙は捨封で表には宗讚岐守どのへとあり裏には單に秀吉とのみ記してある。この文書の形式上から見ても又筑紫乍見物可被成御動座である内容上から見ても天正十四年の文書と認む可きである。して見れば義調が始めて博多で秀吉に謁したのは本書にも云へる如く天正十五年の六月七日であるが宗家は天正十四年に既に秀吉に歸服して居つて而して秀吉から朝鮮出征のことを豫報されて居つたのである。

以上二項(田中萃一耶)

木崎愛吉氏編の大日本金石史 全三卷 附圖一函

曾て大阪朝日新聞に筆を執られ、攝河泉金石史日本金石彙等の編ある好尙木崎愛吉氏は、過去十年間、各地に散在する金石文を探索し、博く其拓本を集め、其數既に一千内外に達するこの事であるが、今回其れに一一詳細な考證、解釋を附し、上代より慶長

迄のもの、約九百種を全三卷一千五百餘頁におさめ、且つ別に、金石文拓本石すり、及實物寫眞菊倍版、コロタイプ百枚(一函)を附して公にせられた。

これ迄、我國の金石文を集めたものは、少くないがそれは、たゞ一時代、一地方、或は一文にとゞまつて居る、しかし、同氏の金石史には、今日迄發見せられた慶長迄の金石文の大部分は、おさめ盡されてあるので、學界に貢獻する所は云ふ迄もなく、且つかく多數の金石文をおさめたものは、おそろしくこれが第一であらう。今其の内容の概要を紹介すれば、

第一卷は大正十年十月五日に發行せられて、其の最初には、「日本金石史一千年以上解説年表」が附せられて、次に總説があつてそれに於て同氏は金石文學を定義して、

「金石文學は、人類の物質的遺物の中、その年代の表出せられたるものに據りて、人類の過去を研究するの學なり、」

と言はれ、「それが考古學の一座を占むるものであることを、明かにして置きたいのである」と

又、「わたくしは、この金石文學を、歴史の補助學科としてよりも、考古學の一分科としてよりも、尙それ以上に、その位置を占有せしむべき程度に、この學科を價值づけたいと思ふのである」と言はれてゐる。

次に、各論に入り、前編に、「飛鳥期より平安前期迄」、即ち一千年以上のもの八十餘種を、後編に、「平安中期より同後期迄」のもの七十餘種をおさめ、

第二巻には、前編に、「鎌倉前期」のもの百餘種を、中編に、「鎌倉後期」のもの八十餘種を、後編に、「南北朝期」のもの百十餘種をおさめ、

第三巻には、前編に、「室町前期」のもの百十餘種、中編に、「室町後期」のもの七十餘種を、後編に、「桃山期」のもの百餘種を各おさめ、總計で七百六十餘種となる。

これに、追加並に別冊のものを加ふる時は、九百種の多數に達するのである。

而して、これ等各種の終毎に、「小結論」を附し、其の時代時代に於ける、金石文の特徴等につきて、論述せられ、最後に、「總結」を附し、同氏の金石文に關する、十數年來の研鑽の結果を論述せられてある。

猶第三巻の終に、附録として、「銅鐸篇」、「新界に於ける先人の業績」の二編並に、「鑄師名録」を附載せられてある。要するに、同氏は「賣れない本」といふことなどは顧みず、獨力でかゝる大部の編纂物を學界に提供せられたるは、同學のものと共に、感謝する次第である。

最後に加へて置くが、同氏はこの金石史發行記念のために、去十二月三日、大阪美術俱樂部に於て、金石文拓本展覽會を催され、起稿の際に、役立たる手拓を主とし、かつ學友等より贈られたるもの、合せて百七八十種を陳列し、當日は數百名の來觀者があり、盛會であつたとの事である。

猶參考迄に記しておくが、これ迄で金石文拓本展覽會は明治四

十四年五月、大阪府立圖書館に於て、開催せられたのが最初で、第二回は大正二年十月名古屋市會議事室に於て、第三回は、大正五年十二月奈良女子高等師範學校に於て催され、第四回は、即ち前記同氏の好尚會出版部主備に依るものである。

十年十二月二十日（武田勝蔵）

三州横山話 早川孝太郎著

玄文社から發刊されてゐた爐邊叢書が、清楚な體裁に變つて郷土研究社から續刊される事となつた。本書はその第六篇で三州豊川の上流横山に育つた著者の幼時聞いた話、又は其後歸省の度に見聞した話を集めたものである。著者の態度の長所は、普通の物語蒐集者の面白く話を作りかへて話すといふ態度の見えないこと、假令断片的な物語も之を其儘忠實に書きのせてある。種々な人、山の獸、鳥の話、蛇の話と云ふ風な網目で集めてあるが、面白いのは今昔物語などと同様な話が存在する事である。即ち八十三頁の「女を追ふ蛇」は、今昔物語卷廿九「蛇見女陰聲欲出穴當刀死語」と同様であり、百五頁「蜘蛛に化けて來た淵の主」は、卷廿三「相撲人海恒世會蛇試力語」と相類似し、九十三頁「シラミ屋敷」は、古今著聞集卷廿、シラミに食はれて死んだ男の話と同様である。かやうな話は、今昔物語作成以前から流布した民話であつて一方で記録せられた事を知らずに依然此村の或人に關し或時起つた事として物語られてゐたのか、或は今昔物語を讀んだ者が之を作り